

『鳥の巣』
シゲ・リウ・フモツド
訳/北川依子


『草葉集』 朝倉かすか
木下尚江
『星の子』 今村夏子
五里菜子

エリサベ・リウ・フモツド、28歳。
博物館勤務。報はなし、叔母と5人暮らし。
「とことんつまらない人間」で、「自分の存在が日々の母関をでさるが身」苦痛な過激な「ことわざの改訂」で、
『草葉集』の詩画を2015年12月、彼女が毎日生きている
いた。
おる時から彼女宛に「奇妙な手紙が」
届きはじまる。彼女を非難するよう家庭のその手紙を、
彼女には「ついに言葉が」付たしを思いついて「たとえ
大げな保障し、毎日贈るようになる。
また「彼女生
活の生活にあらわれた、小さな変化。それは、まだ「彼女生
活」がたい、彼女の「彼女たち」となり、つとつと時時、空気に
乱暴に動きまわる。

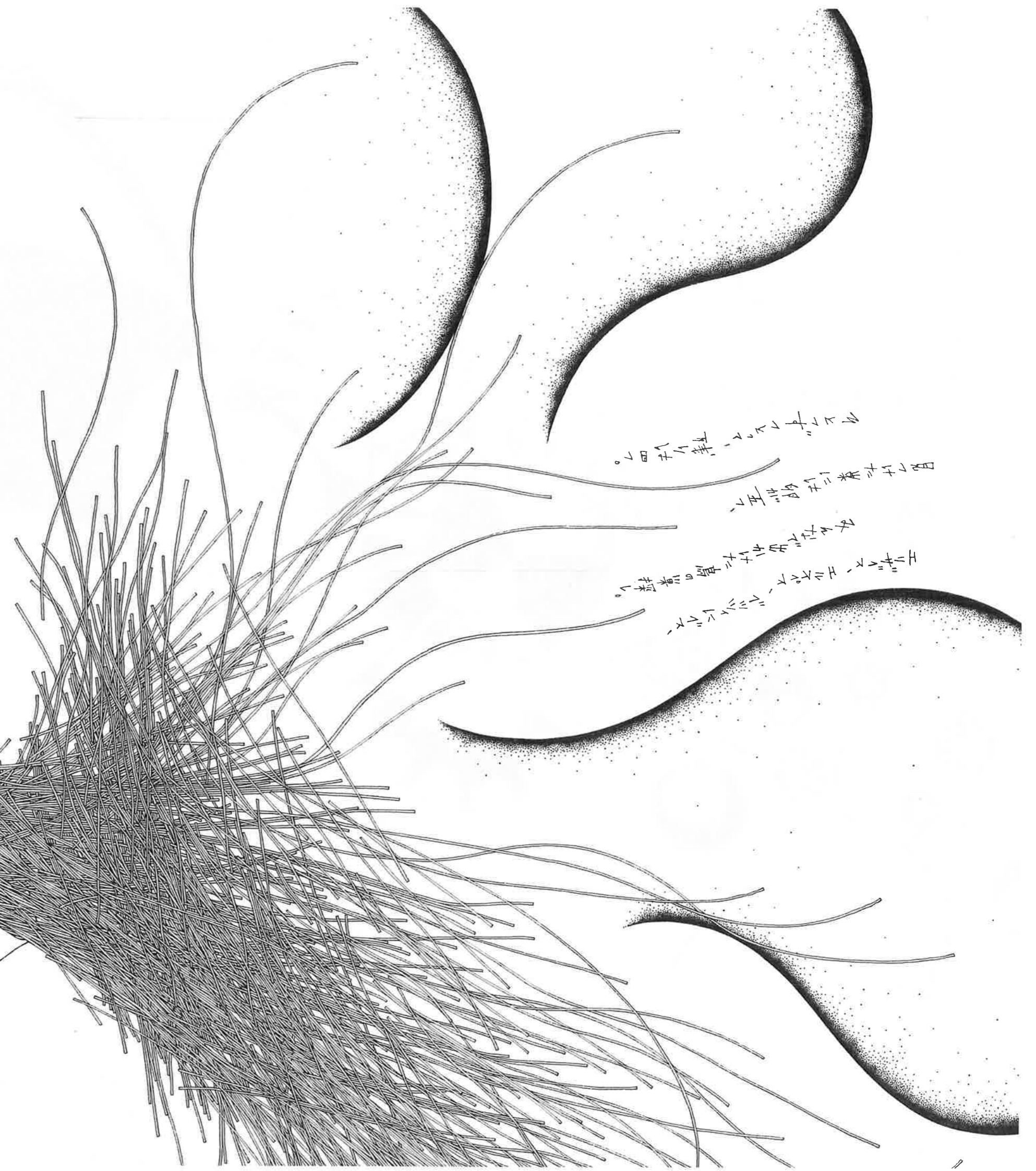
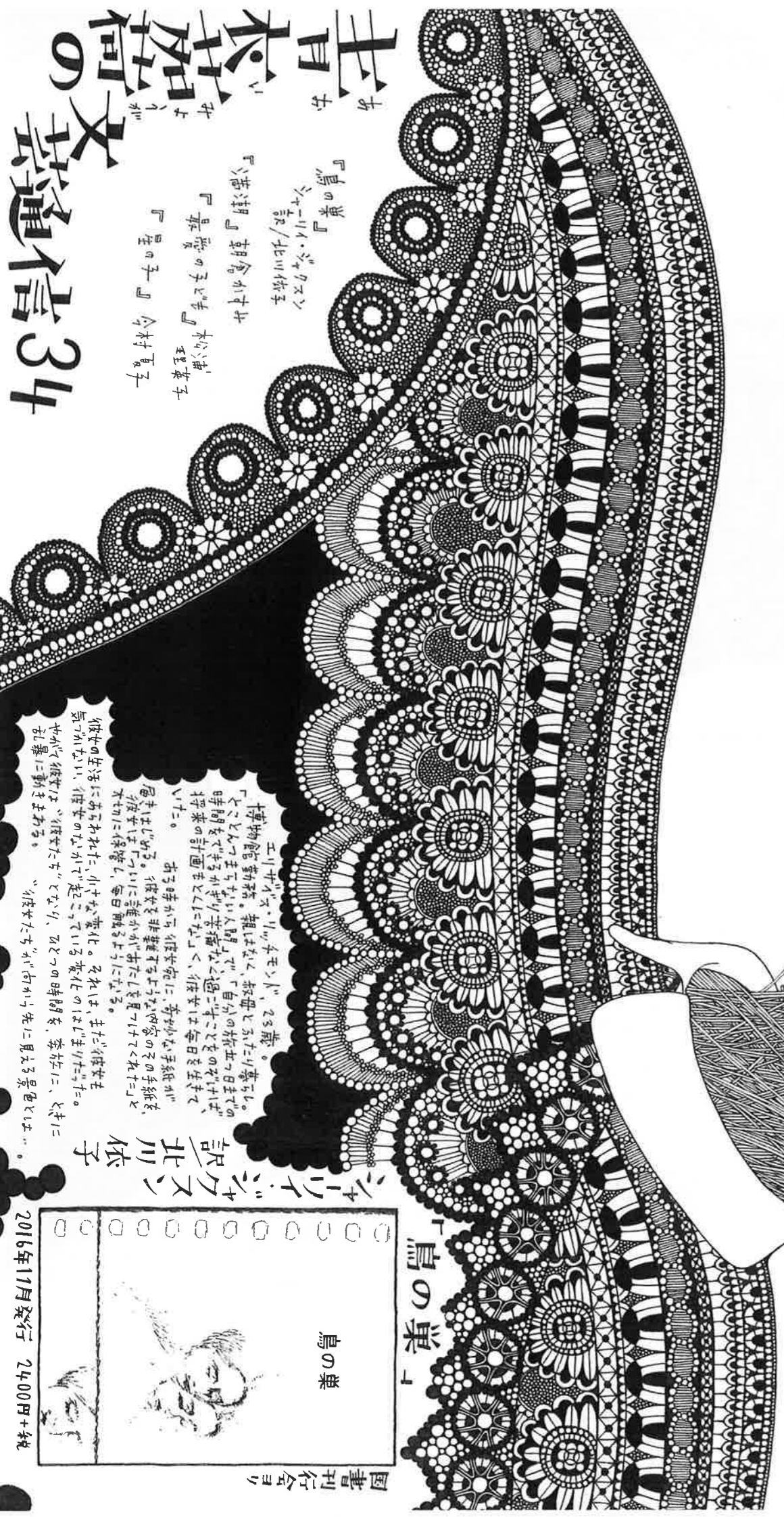
訳/北川依子

図書刊行会ヨリ

鳥の巣



2016年11月発行 2400円+税



「鳥の巣」
「鳥の巣」
「鳥の巣」
「鳥の巣」

「満潮」



朝倉かすみ

光文社ヨリ 2016年12月発売
1800円+税

きのうまゆこ
木之内眉子、23歳。北海道から上京し、健康食品会社でバイトをはじめた一年後、社長の直人と結婚。

物語は、披露宴の場面から始まる。華やかな披露宴会場のなか、眉子を見る青年・茶谷。配膳係のバイトとして会場に居た茶谷は、眉子を発見し、自分こそ眉子にふさわしい男だと、その後、慎重に、確実に、眉子に近づいてゆく。

眉子の結婚生活に、少しずつ、少しずつ、不穏な空気が入りこむ。けれど、その「不穏」の中心に居るのは、眉子自身。

『だれかの「ために」動いていないと、あたしのからだは「刺刺しい」になる。』

『「だれかを喜ばせること」は、わたしにとって、現実とは少しずかい。喜ばせるだれかの夢のなかに、潜り込もうとしているような感覚がある。そのだれかの夢は、そのだれかを喜ばせようとするとき、あたしの夢とぴったり重なる。』

眉子のことを全部は知るほど、眉子がつかめなくなる。
「眉子は何処に居るんだろう」と、それだけを思いページをめくる。

直人という夫、茶谷の行動、眉子の過去…。
ニメーションの眉子の表情、そして、眉子が見た景色は、思い、読むたびに、色を変えていくだろう。

「星の子」



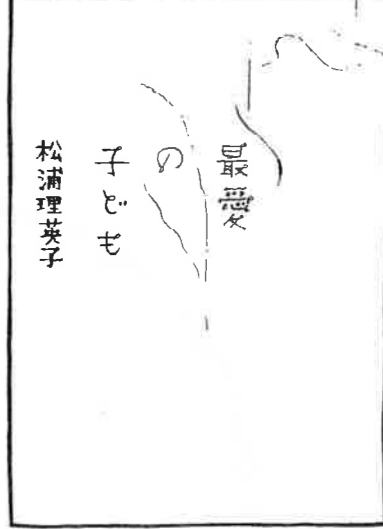
今村夏子

林 ちろる、中学生。
生まれたときから体が弱かったちろるを救ったのは、『金星のめぐみ』という名の水だった。父親が、厚労省の人に養女でもらったという、その水は、ちろるの体をみるみる治し、両親はそれ以降、その水を扱う団体には所属していない。
その水を溶かしたタオルを頭に巻いて生活する両親。

ちろるが小学二年生のとき、母親の弟が、「だまされてる」
『子供たちがかわいそうだと思わないの？』と、親戚に来るが、ちろるは、「わたしは、ちとこがかわいそうで「はな」い、と思う。
ちろるの、五歳上の姉は、ちろるが小学五年生の時、家を去った。
ちろるは、自分たち家族が、周りからいろいろと言われていることを知っているけれど、両親のことも、自分の居る世界のことも、きらいじゃない。
ちろるが、ちろるで居るということに、何も怖ろしいことはない、世界はちろるの目と、きちゃんと映っている。
これがちろる、ちろるのままあるように、と、読み終えたあと、ただ思う。

朝日新聞出版ヨリ 2017年6月発売
1400円+税

「最愛の子ども」



松浦理英子

私立玉藻学園高等部二年四組。
女子ばかりのこのクラスには、ひとつの「家族」が存在する。
まよあ（パパ）・日夏（ママ）・空穂（子ども）の三人だ。

クラスメイトの「おたしたち」は、三人の関係性をうとむ観察する。『とにかくおたしたちは、日夏とまよあをおたしたちの世界での空穂の親と認識した。そして、三人を「おたしたちのファミリー」と呼ぶことになった。三人をおたしたち自身の家族と考えるのではなく、みんな「金銭的に豊かであるアイディア的な」一家族という意味での「おたしたちのファミリー」だ。』

三人のバランスが、変化してからも、「おたしたち」は崩れていない。三人のなかで何が「おたしたち」は想像する。三人の仕事・言葉のつらさを丁寧に受け、まるで「実際に見たかのように」、徹底的に細に入り、想像する。

実際の出来事と想像が入り混じりながら、物語はつなげられる。「見る少女たち」と「見られる少女たち」。「少女たち」という共同体が放つ、世帯が「危うい匂い」に酔い、胸がいっぱいになる。まよあ、となる。

文藝春秋ヨリ 2017年5月発売
1700円+税